

和名倉百年の森

wanagura hyakunen no mori

NPO 法人百年の森づくりの会

2017
4.1

33号

巻頭言……1 / エコサロン公開講座 秩父地域に見る 山仕事の儀礼と禁忌……2-7 /

田村市植林視察……8-9 / 和名倉山森づくり報告……10-11 / 年間スケジュール……裏表紙

『木を植えた男』のアニメ映画

理事長

小林 公彦

先日図書館で「木を植えた男」という短編アニメ映画のDVDを借りてきて見ました。

この映画は、フランスの作家、ジャン・ジオノの小説を、カナダのアニメーション作家フレデリック・バック監督・脚本で製作されたアニメーションです。動画は色鉛筆によるおよそ2万枚のパステル調のスケッチからなる映画で、4年半かけて制作されたそうです。

あらすじは以下のような内容です。原作者であるジャン・ジオノが実際に体験したことを回想する形で話が進みます。1913年のこと、フランスのプロヴァンス地方の山深い地域を訪れた作者は、その荒れ果てた地で一人の男に出会います。それは羊飼いの男でした。無口でしたが温厚な態度で突然の来訪者である作者を快くもてなしてくれました。

羊飼いの男の名前はエルゼアル・ブレイエです。彼はジオノの前で丹念にカシワのドングリを選び分け、完全な形をした100粒のどんぐりを選びました。翌日に一本の鉄棒を持ち、荒れ地に向かいます。そして、鉄棒を地面に突き立てて、穴の中に一つ一つ選り分けたどんぐりを埋め込んで、丁寧に土をかぶせました。

その様子を見てジオノが質問すると、3年前からこの荒れ地に木を植えているとのことでした。彼によると10万個の種

を植え、そのうちの2万個が芽を出しても、その半分近くは動物にかじられたり、予期せぬことが起こるかしてだめになるだろう。それでも1万本のカシワの木がこの不毛の地に育てばとの思いで行動しているのだと話すのです。ブレイエは息子や妻を亡くし、世間から離れこうして不毛の地に生命の種を植え付けることに自分の役割を見出したようです。

翌年、第一次世界大戦が勃発して作者は戦場で過ごすことになりましたが、戦争から戻った作者は無性に新鮮な空気が吸いたくなり、ブレイエが植えた荒れた地に向いました。そこで目にしたのは、ブレイエが植えた1万本のカシワの木が見事に育っていた光景でした。

やがて第二次世界大戦が始まりましたが、ブレイエはそんな中でも黙々と木を植えて続けていました。1945年作者がブレイエに会った時、ブレイエは87歳になっていました。ブレイエは木を植えた森はいつしか広大な面積に成長してました。荒れ果てた地は森が再生したことで、水を育む地になり、新たな入植者も現れ、人が住み集う耕地に変わっていったのです。しかしそこに集う彼らはブレイエの存在も、一人の男が森を再生した事など知らないのです。

この作品は、一人の小さな行動でも地道に努力することで大きなものになる。

もっと大げさに言えば、この地球を変えることができるということを行っているような気がいたします。

このアニメ映画はアカデミー短編アニメ賞を受賞しました。また、この絵本は、小学生高学年くらいの子どもでも読める作品として日本語訳で数々出版されています。1989年の初版から60刷を数える息の長い絵本で、「絵本にっぽん賞特別賞」を受賞した名作です。既にDVDを見たり、この絵本を読んだりしていますが、見る方も多いいのではないかと思います。まだDVDを見ていない方、また絵本を読んでいる方は触れてみるのもいかがでしょうか。

「百年の森づくりの会」も発足してから約20年活動を続けてきました。この作品の中にもありますが、すべての苗木が育つ訳でもなく、植えた苗木の1割でも育ってくれば良いのかなと感じております。

また、木の成長には、一代二代と時間がかかるものです。だからこそ次世代に繋いでいくことが今生きている我々の使命ではないかと思っております。

我々の力は小さいかもしれませんが、地道に活動していくことが大きな財産になるのではないかと思います。会員の皆様も一緒に活動していただければありがたいと思っております。

エコサロン公開講座（平成二十八年十一月十三日）

「秩父地域に見る 山仕事の儀礼と禁忌」

講師 埼玉県文化財保護審議会 委員 柳 正博 氏



（はじめに）

私は秩父の出身で、中学・高校時代はいろいろな山に登りました。中学生の頃は生物部に所属し、その当時の顧問の先生が哺乳類の研究をしていたため、夏・冬・春の休業中には採集で山登りに出かけました。その時にオコジョの話聞きました。実にすばしい動物で、なかなか捕まえることはできませんが、オコジョを見ると「山が荒れる」という伝承があります。「山の神」ともいわれているので、山師は手を出さないそうです。登山者はオコジョに出会うと、「夕立が早い」といって山小屋へ急いだそうです。山小屋で燃料に使

う薪のすき間はオコジョの絶好の住処で、小屋に入ります。ネズミを食べてくれるので、山小屋でも都合がよく、共存共栄になります。

今日は山仕事における「山の神」についてお話させていただきます。山仕事に携わる人たちが、仕事の安全を祈るためにどのような行事を行ったかということを中心に話を進めます。



オコジョ

（「山の神」とは）

「山の神」は、山仕事を行う人たちを守護する神として信仰されていますが、その性格づけは多岐に及んでいます。山仕事をやる人のほかに、狩猟仲間も山の神を信仰します。獲物を解



ヌルデ

体する時は必ず山の神を拝み、安全を祈願してから始めます。これからお話し話する「山の神」は、山仕事の仲間の信仰に視点を当てます。

（年中行事に見られる山林儀礼）

新しい年を迎えると、「初山」とか、「山入り」と呼ばれる行事が行われました。秩父では1月2日ですが、6日ということころもあります。この日、年男が恵方の山へ行き、木の枝に付けた御幣を立てて、そこに餅の切れ端やオサゴ（米粒）と塩を供え、一年の山仕事の安全を祈願します。その後、仕事初めとして近くの木を何本か伐り、家ま

で持ち帰ります。秩父地域では小正月のモノツクリの素材のオツカド（ヌルデ）やニワトコという木を伐ります。

次は、「山の神祭り」です。

秩父地域では毎月17日を「山の神様の日」といい、山仕事の仲間が山の神の祠に詣で、安全祈願を行いました。特に、1月や8月はヤドの家に仕事仲間が集まり、一年無事に済むようにと盛大に宴が催されます。この日は、「山の神が狩りをする日」、「木種をまく日」、「木の数を数える日」などといって、山に立ち入ることを禁じ、これを守らなければ大けがをすることによって戒めています。山の神はオコゼ（魚）が好物といわれて、供えるところが他県で見られます。県内では川魚を供えるところがありますが、これと関連があるのかわかりません。

ここで少し山仕事の組織についてお話しします。そこには、

「元締」とか「庄屋」とか色々な名前が出てきます。第二次世界大戦前の様子を秩父市中津川で伺ったことがあります。会社つまり製材所が「この山の木を伐り出して、運んでくれ」と山師に頼む場合、山師の親方である庄屋が山へ行き、どんな木がどれだけあるか調べます。「木を買うより、ダシを買え」と言われるように、伐った木を運び出すのは大変な作業です。それらを総合的にみるのが非常に大切です。そこで、搬出の手間がどれだけかかるのか、どれだけ経費がかかるのかという見積もりをして、その金額で何とかなることが分かると契約がまるとまる訳です。そして、山の持ち主にお金を払って木を伐つてもらう事になります。会社側（依頼者）の代表、つまり山林の見回りや仕事を監督する人を「総裁」といいます。受け側（庄屋）は製材所から依頼を受けて、仕事の規模に応じて山師の人数を集めるそうです。どの規模で何人必要かという事は、長年の勘によります。庄屋の代わりを務める人を「代人」といい、信

頼の厚い人がなります。「小庄屋」あるいは「帳付」といって、帳簿や書類の管理や賃金計算の仕事を行う人もいます。賃金は、会社から一括して庄屋に渡されます。それを頂いた庄屋は山師に給料を払います。この請負は、伐採だけではなく製材所まで運ぶ作業も含まれます。中津川には戦前庄屋が4人いたそうです。山師は通常20〜30人で、主に大滝、荒川、両神辺りから頼んだそうです。一般に雇用期間は2月から11月が多く、前金（ぜんきん）として、1、2か月分の賃金相当額を渡し、あとは小遣い程度でした。賃金は代人が家族に送金しようです。山の中ではからお金を使いたくても使う場がありません。賃金の他にサカテといって、代人が山師の1日の働きぶりを見て評価をし、竹の棒の先に紙幣を入れて山師に渡しました。サカテをもらう事で山師は働きがいがあり励みになったそうです

（山入り）

昭和58年に皆野町下田野の谷草（やくさ）耕地のある家でお



山入り（皆野町下田野）

話を伺った時の話ですが、1月2日に年男（当主）が餅とオサゴを持って恵方の山へ向かい、1年の仕事の安全を祈願します。その後、「仕事始め」でオツカド（ヌルデ）やニワトコを伐り、これを家まで運びます。そして、13日に庭先でハナカキという鎌を小さくしたような道具で木を削り、「削り花」と呼ぶハナを作りまます。削り花のほかに、箬やカユカキボウなどを作ります。作る物は家によって異なるようです。削り花は「秋の実りはかくあれかし」という願いを込めて、模範的に作ったものを神に供える予祝の儀礼です。これを大神宮様や恵比須・大黒様

など、家の神様にお供えしました。小正月の作り物は、「恵比須講の風に当てるな」といって、1月20日の恵比須講に片づけまます。恵比須講がすむと、お正月の行事は終わりになります。14日には女の人が米の粉でマユダマを作ります。田んぼがない地域では、粟や黍などの雑穀で作ります。マユダマの形は、丸のほかに、繭、鳥、杵、白などがあり、カブギと呼ぶ桑の枝に刺して床の間に供えます。秩父市に虚空蔵様のお堂があり、1月13日、14日の縁日には高崎から来た商人が「だるま市」を開きます。参拝者はそこでダルマを買い、御札といっしょに床の間へ供えます。このときはダルマの片目に墨が入りませんが、もう一方の目は無事に養蚕が終えたときに墨を入れます。15日は、小豆粥を作りますが、ご当主がカユカキボウで釜の中の粥を3回り半かき回します。棒の先にマユダマを付ける家もあります。箬はハラミバシと言って、中央部が膨らんでいて、普通の箬と比べやや使いづらいますが、この時どんなに熱くて

も吹いてはいけない。「吹いて食べると田植えの時に風が吹く」という言い伝えがあります。カユカキボウは神棚に供えておき、苗代をつくる時に水の取り入れ口に立てます。「田んぼの水の通りがよくなるように、水が豊富に確保できるように」という意味だそうです。

秩父市中津川ではツツザケ、オサゴ、塩それに尾頭付の川魚を持って山の神の祠にお参りにいきます。「今年も」お守りください」と祈願し、その後、サワシバという木に、半紙で作ったヌサ(御幣)を結び、今年山に入る場所に立てた後に立木を2、3本切って初仕事としました。

(山の神祭り)

山の神祭りは、山仕事の仲間が集まって山の神を拝み、安全を祈願する行事です。秩父、児玉、大里周辺では、毎月17日を「山の神様の日」と言っており、1月や8月は盛大に行いますが、普段の月は山の神の祠に行つて安全を祈願する程度です。それに対して比企、入間では節分すぎの初申の日に「山の

神講」を行います。場所によつて「山の講」、日高では「野猿講」、ときがわ町では「初野猿」などといいます。山の神講の日は山仕事の仲間が集まつてお日侍を行います。山仕事は休み、特に伐採は厳に慎むようにします。

長瀬町風布の山の神祭りは大鉢形、阿弥陀谷、蕪木(かぶらぎ)の三地域の代表が大鉢形の山の神の祠に集まり、ツツザケや餅やおサゴを供えます。初めにしめ縄や幣束を替え、それが終わると三組の組長が集まつて安全祈願を行います。その後、大鉢形の組長宅で直会をします。阿弥陀谷では独自に、2月の節分すぎの初申の日にうどんや赤飯で安全祈願をします。

小鹿野町藤倉には、山仕事の仲間の組織が3班あります。普段の月は個別に行いますが、1月17日だけは3班が合同で山の神祭りをを行います。ヤドは各代表の家を持ち回りにし、山の神の掛け軸を掛けて安全祈願を行います。それが終わると、あぶらげずしや煮しめでお日侍をしました。古くは、御祝儀のように、一人一人に膳が仕度された

ようです。この日は一日酒を飲んで祝うので、山の神の祠は翌日ヤドの家が詣でて、ツツザケやおサゴを供え、安全を祈願しました。

横瀬町芦ヶ久保の赤谷耕地は堀上、堀下の2地区に分かれています。横瀬川右岸の傾斜地で、南側の斜面に集落が開けています。ここは節分後の初申の日に山の神を祀っています。弓矢を作つて山の神に供える点が特色ですが、飯能市の名栗辺りでもこういう行事があります。山伏峠を越えてすぐですから、名栗との行き来があつたのかも知れません。



山の神祭り (小鹿野町藤倉)



山の神の掛け軸

(伐採開始と終了の儀礼)

山仕事で何と言つても大事なものは伐る作業です。一番事故が起きやすいのはこういう時です。伐採を始める日を「山始め」「よき入れ」「入山式」などと呼びます。

秩父市中津川の例ですが、入山式の時に、ヌサ、オサゴ、ツツザケ、塩などを持って山の神の祠に詣で、祈願を行います。翌日から作業開始です。

伐採にあたり、最初の1本を切り倒した伐り株に榎の木の枝を立てて、「これからこの山の木を伐らせていただきますが、無事に仕事をさせてください。伐つた後は新しい木を植えますから、怒らないでください」と声を出さずに頭の中で言いながら山の神様に祈る地域もあります。

「後のケアも行いますからよろしく願います」という気持ちで込められています。秩父地域では、この儀礼の呼び名は特にないようですが、『広辞苑』で調べてみると、「鳥総（とぶさ）」という言葉があり、「きこりが木を伐ったとき、伐った梢をその株に立てて山の神をまつたもの」という解説があります。伐採作業が終わると、仕事仲間が集まり、お祝いをします。

長瀬町風布で山仕事の儀礼の話をついた時、「木を伐った後どんな気持ちですか」と聞いたら、「伐った倍ぐらいの植林はしたい」と言っていました。伐って良かったのではなく、後の事も考えている訳です。植林は二代、三代と続くことです。長期的な展望です。

閉山とは仕事の区切りをつけ、無事に終わって山を閉めますという意味です。儀礼食は、アンコモチや大福、中津川ではバンダイモチを作ります。

(山仕事の禁忌)

山仕事には、禁忌という行為があります。たとえば、伐つて

はならない木という伝承があります。大木やY字形の木は「山の神様の休み木」、枝ぶりが平らな木は「山の神の腰掛木」、枝ぶりが平らな松は「お天狗様の腰掛松」などで、こうした木を伐ると、山の神様の祟りがあるといって戒めていました。それを伐つたりすると不思議にけがをすることが多く、そうした事実がより説得力を高めています。

ほかに、山は神聖な場所、不浄を嫌う思想があります。人が亡くなった場合はブク、出産があった場合をチブクといいます。いずれも、「山の神様を穢(け)がす」ので、山に入つてはいけないといわれています。お産は血を伴うので、こうした伝承につながるのではないかと考えられます。集団で仕事をしている時、あるお宅でご不幸があった場合は、その家で気を利かして山に入ることを避けたよう

(炭焼きの儀礼)

広くいえば、炭焼きも山仕事の範疇に入ります。炭焼きの場

合も秩父市三峰では毎月17日に山の神様にツツザケを供えて安全祈願を行います。小鹿野町藤倉では、この日カマの天井にツツザケを供えます。皆野町金沢では、元締がヤキコと呼ぶ作業員を招いて、ごちそうをふるまっています。初午や彼岸の日にも同様の儀礼を行います。初午は元々火を使う仕事ですからその日は休み、仕事の安全を祈願したようです。



正月のお供え (嵐山町平沢)

比企地域を見ると、嵐山町平沢では正月にカマに餅を供えます。カマの上に半紙を置き、そこに鏡餅を供えます。鳩山町熊井ではカマに覆屋がありまして、

その柱に正月の松飾りと柵をしぱり付け、その前に餅を供え、1年の安全祈願を行います。ときがわ町大野では「山の神様へ」といって、餅を半紙にのせてカマに供えます。



カマの松飾り (鳩山町熊井)

(実務における儀礼)

一番大事なのはカマツキ(カマの構築)です。きちんとしたカマで焼かなければ、よい炭ができないので、この作業は炭焼きの基礎をなすものです。失敗すればそれまでの手間がすべて無駄になります。それだけにカマツキがうまくいくように祈るのは至極当然のことです。

横瀬町芦ヶ久保では、大安や先勝、先負、友引の日を選んでカマツキをします。逆に、仏滅や赤口の日は避けています。カマをつくる場所のそばに炭焼き小屋をつくり、材料を置いたり休んだりする所に山の神を祀ってツツザケを供えます。このツツザケは、カマの完成後、カマの天井にのせます。

次に、カマの完成後の儀礼ですが、秩父市浦山では「天井上げ」といって、無事に作業が終えたことを感謝し、山の神や天井にツツザケを供えます。この日、作業を手伝ってくれた人を酒やごちそうでもてなします。秩父市中津川ではハチアゲイワイと言って、カマニワで酒を飲んで祝います。山の神にカマを見ていただくために、カマクチで少し火を焚き、煙を上げて、山の神に見ていただきます。そして、アサミの枝に付けたヌサをカマの後方に立てて、山の神を祀り、ツツザケとオサゴ、塩を供えます。アサミの木は悪魔祓いとか厄除けに用いる縁起の良い木といわれています。煙の出口をクドといい、そこ

が煙突に繋がります。カマで一番重要なのは天井がしっかりとれている事と、クドがきちんとしていてことです。クドの微妙な角度によってうまく焼けたり、失敗したりします。これは長年の経験がものをいいます。クドにツツザケを供える場所もあります。皆野町金沢では、カマが出来ると塩をまき、クドのそばにツツザケを供えます。

比企地域の事例を見ると、ときがわ町大野では「テツペンアゲの祝い」といって、カマに御神酒を供え、手伝ってくれた人を酒やうどんでもてなします。ある調査で大野におじゃましたときに、カマツキを行うお話をしていただいて、私もお手伝いいたしましたが、棒で何度も土をたたいて固める作業は非常に重労働でした。中途半端に叩くと天井が落ちてしまうというので、しっかりと固めなくてはならないのです。大変疲れましたが、いい経験をさせてもらいました。秩父市浦山では、新しいカマで初めて炭を焼くときは、天井にツツザケを供え、無事に焼けるように祈願します。皆野町三

沢では、炭焼きを始める前に、「仕事初め」といって、ツツザケと塩をカマの脇に供え、拜んでから作業を始めるところもあります。



カマツキ（ときがわ町大野）

比企地域でも次のようなお話をうかがいました。ときがわ町大野では、新しいカマに初めて火を入れるときは、「火入れ」といって、カマの焚き口の上に御神酒を供えます。同じ町内の雲河原では「山初め」といい、カマのそばに神を立てて御神酒を供えます。

嵐山町では、白けしのカマを見せていただいたことがあります。白けしは焼けた炭をそのま

ま挟んで取り出して、カマニワで砂をかけて消していきます。これに対し、黒けしはカマの中で消えるまで置きますが、ここが白けしとの根本的な違いです。ちなみに、備長炭は白けしです。今はスイッチ一つで何でも出来る時代ですから、墨の需要は激減しています。

ときがわ村の大野のお宅で、「今どんな人が炭を買いにくるのですか」とお尋ねしたところ、焼き鳥屋、焼肉屋、それに茶道の先生からの注文もあるそうです。焼肉は炭の方が中まで焼けるので需要があるそうです。



シロケシの取り出し（嵐山町遠山）



クロケシの取り出し（嵐山町平沢）

（炭焼きの禁忌）

炭焼きで一番嫌うのは、女性がカマに入ることです。秩父市三峰では、女性は普段からカマに入らずに、カマニワで木を集める作業を行うようにしました。秩父市中津川では、女性に月のあるときは「カマの天井が落ちる」といって、カマに近づぐことを避けたようです。

小鹿野町藤倉では、不幸があった家や月のある女性がカマに近づくと、カマの神様が見破り、炭がくずれるといいますが、科学的な根拠には乏しいよ

うですが、不浄をさらう気持ちでありますが、炭焼きは危険を伴う事もあり、それを避ける為心がけたことではないかと思えます。

ときがわ町大野では、申の日に炭焼きを行うことは避けていました。「申の日に山に行く、道に迷うからよすべえや」といって、この日の仕事は控えていました。

（天狗の伝承）

小鹿野町藤倉の八谷（やがい）耕地で昔うかがった話ですが、げた屋のSさんという人が居りまして、お犬様の御札を持ったままどこかへ行ってしまった。

ある晩、Sさんと同じ地域の住人が炭ガマを掃くために山小屋に出かけたところ、何者かに小屋の棟をゆすられ、布団をかぶせられたうえに金縛りにあい、身動きができなくなったなど、いくつか信じられないような出来事が起こった。そこでSさんにお犬様の御札を返しに行かせたら、その後はピタリとそういう事が止んだそうです。これはきっとお天狗様の仕業だろうと

いう事がまことしやかに伝えられています。

秩父市上吉田の女形（おながた）耕地では、ある山師が天神様の日にお天狗様の松を伐ったところ、木を伐ってかえる音はしたが、その後静まり返った。どうしたのかなと現場に行ってみると、山師は木の下敷きになって死んでいた。「物日だからやめた方がいい」という家族の制止も聞かずに伐ってしまった結末でした。これはお天狗様の祟りを受けたと言われています。

そもそも天狗は山に棲む妖怪ということ、仕事仲間の間では恐れられていました。その反面、「夜、お天狗様が現れて木をまくって（集めて）くれた」という言い伝えもあり、関わり方はさまざまですが、天狗は山で働く人たちにとつて身近な存在だったのではないかと思います。

（まとめに代えて）

これまでお話しした儀礼や禁忌は、今から30年前に聞いた内容です。その時にお話ししていた人はもういなくなりました。

らっしゃるのではないのでしょうか。山仕事も昔のようではなく、これまで伝えられた儀礼は、過去のものになっているのではという気がします。

山仕事の儀礼で多少現実離れたところがあるのは、山の秩序を守るのと同時に、安全に仕事ができるように、先人が見出した知恵がこの中にあるのではないかと感じています。そこに見られるのは、山の神に対する畏怖の念と共に、山で働く人たちにとって山の神は心のよりどころとして機能しているのではないかとことです。

和名倉山で活動されている皆様方にもこれからの活動を通して、山の神の恩恵とか、山への祈りといったものをどこか頭の片隅にお感じになりながら活動されるとよろしいのではないかと思います。以上で山仕事の儀礼と禁忌の話を終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

（文責事務局）

(平成二十八年十月十八日)
福島県田村市に植林した後の視察(2回目)

常務理事 守谷裕之

東日本大震災被害復興森林復旧事業支援植樹活動を2014年4月6日(日)に実施してから2年8か月を過ぎました。昨年は夏の初めの7月に視察に行きました。輝く緑いっぱいの世界が一面に広がり太陽の光をたっぷりと受け木々は勢いよく育っていました。

今年度はなかなか日程が決まらずのびのびになっていました。葉が落ちる前に出来るだけ早く行こうと10月18日行く事を決定。山々は色づき紅葉のニュースが流れる時期、植林したブナはどんな色をしているのだろうかと楽しみに現地に向かいました。現地に着くとまず驚いたことは17年もので直径が8cm高さ2m以上もあるブナがどこに植えたのか分からない状態であった。



植栽時は更地状態(2年8か月前)
所々に低木の葉が見える程度であった。



何とかブナの先端が見える。(現在)



林道より上の斜面のブナはしっかりと縄張りを主張しているようでした。



ジャングルの中を進むような感じ

支柱の竹、目立つはずのピンクのリボンも探すのが大変である。自生していた木々の勢いは大変なものがある。それでも植栽したポット苗もたくましく育っているのを見つけることが出来た。



支柱の竹の棒は3cmある。それに負けず劣らず育っている。



植栽した楓が見事に赤く色づいていた。



大きなブナの芽



数本太さを測ってみると、胴回りが太いもので17cm
1.5m離れたブナは13cmという結果でした。
しっかり根付いていた。



ここは不思議に自生の木がなく光を
たっぷり浴びて凜と立っている。

自生している
木々にはかなわ
なくても何とか
条件が良ければ
育っていること
を確認出来まし
た。
植林した木が
これから生存競
争の中でどうな
って行くのか見
届きたい。森づ
くりのだいご味
である。

2016年度下半期

和名倉山森づくり報告

和名倉山森づくり事業担当 高岡正彦

和名倉山は、1964年（昭和39年）と1969年（昭和44年）に山火が発生し、多くの樹木が焼失しました。その跡には成長の速いカラマツを植林するなど、森の復興が図られました。同時期、林業の衰退で山での仕事も少なくなり往來が激減し、多くのルートが2m以上のスズタケで覆われ藪の山となってしまいました。

そのような和名倉山を以前のような水を育む山に復元するために、1997年埼玉大学ワンダーフォーゲル部OB会が活動を始めました。その後、NPO法人百年の森づくりの会として事業を拡大しています。2000年までに失われた道の復元を行ない、2001年には樹木の生長が遅いところに、和名倉山の在来種であるブナの苗を植林し始めました。植林を始めると、鹿による食害に悩まされ、植林よりも、現有樹木を守るほうが先と考えました。現在は現有樹木に鹿よけネット巻く作業が主になっています。2003年には旧大滝村村有林の管理小屋だった仁田小屋を改修しこの事業のベースキャンプとしています。この小屋は会員の力でログハウス風に作り上げました。

（なお、和名倉山は山頂が県界でない山々における埼玉県の最高峰です。ご存じだったでしょうか？）

2016年度上半期

5月28・29日 38回ワーク

（仁田小屋下整備・小屋周辺の調査）

4月29・30日 ナシ尾根偵察

10月22・23日 39回ワーク

今回のワーク（和名倉山での一連の作業のことをワークと呼んでいる）では前回に引き続き「仁田小屋整備」と「小屋周辺の調査」を行なった。

参加メンバーと西武秩父で合流して、いつものように、旧大滝小学校三峰分校へ行

き、資材を積み込んだ。この分校を借り出してもう十年経とうとしている、その間、

三峰神社へのカエデ、ブナ、蠟梅の植林ではここをベースキャンプとさせてもらったこともある。ここからさらに、車で鮫沢橋まで入ってから、徒歩で林道歩き一時間半、荒沢の出合から傾斜がきつくなるそして、仁田小屋沢の出合から山道になる。鮫沢橋からここまで約二時間半である。十五年ほど前までは仁田小屋沢の出合まで車が入った。最近では頻発する土砂崩れの心配から、鮫沢橋から歩いている。少々面倒くささはあるが、歩き慣れると仲間とおしゃべりしながらのこの入山はちょっといいものになってきて





仁田小屋の下のガレ場の崩壊は徐々に進んでいる。

いま、単管パイプを打ち込み土砂の流出を防ぐ事と植物の自生を促進させて土砂の安定を築こうと考え、さまざまな試みをしている。ネットを斜面に張り落ち葉等が堆積しやすいようにしたり、柳、ブナ、笹、タラなどを植えている。今回はホオゾキがたくさん自生していた。いつ植樹したかは思い出せないが、こんなガレ場でも植物は根を張るのだと、皆感心している。ブナは、依然上部に持ち上げるために持ってきたものを仮植えたものだが、立派に育っている。このままここで育ち、母樹になつてくれるといいなと、皆で楽しみにしている。



今回も、いずみ高校の山岳部の生徒が5名参加している。チャーンソーで間伐材を切ったり、斧でマキを割ったり、他では経験できないことを体験している。1年生が3人参加しているので、参加の大人たちはこの先も大いに期待している。



今回は、長瀬で育てているブナの苗木200本の仮植場所を選定することも目的だった。候補地の①は



仁田小屋から20mほどいったやや傾斜の緩い広場である。(写真上)ここは、確かに光が差し込む場所であるがさほど広くはなく、2、30本程度しかおさまらない。

候補地の②は仁田小屋沢出合で登山口のすぐ上の砂防ダムの上である。(写真下)ここは日当たりもよく広さもあるが、思った以上に斜度があり、土ではなく直径3cmほどの小石の斜面だった。ここでは、苗が根を張る前に流されてしまう恐れが大きい。

以上のことから、仁田小屋付近で仮植適地は見つからなかった。すでに2mほどになったブナの苗なので掘り起こすのも、運び入れるのにも大きな労力がかかる。よほどいいところならばともかく、今回の候補地では心配のほうが大きい。

さて、振り返ると、この会が和名倉山に踏み行ってから二十年が経つ。当初、焼失した木々を復興するために、植林し始めたのだが、落葉松の成長もあり、自然による復興は確実に進んでいる。コンセプトの修正が必要になってきている。現状から考えると、鹿の食害はまだ予断を許さないが、対策として行なっているネット巻は有効だと思われる。また、うっそうと茂っていた笹が枯れ、それと同時に鹿も見かけなくなった。このことから、鹿の頭数は減ったのかもしれないが、笹がなくなった分食害され易くなったのかもしれない。

また昨今、環境問題がさほど大きな問題に取り上げられなくなった感がある。私としては、和名倉山での観察を継続し、水を育む自然との共生をコンセプトの中心にと、考えているところである。



2017年 活動スケジュール

活動への参加をご希望の方は、事前に事務局まで御連絡ください。

	総会・理事会	フィールド活動		苗づくり	エコサロン他
		和名倉	宝登山/大陽寺		
4月	■会報33号発行 ○4/17(月)常務理事会		■宝登山下刈り作業 日時：4月23日(日) 集合：9：00/宝登山 ロープウェイ駅前広場		
5月	●5/15(月)理事会 場所：未定	◆第40回和名倉山ワーク 日時：5/27(土)～28(日) 集合：8：30/西武秩父駅	■宝登山下刈り作業 日時：5月21日(日) 集合：9：00/宝登山 ロープウェイ駅前広場		
6月	■第10回通常総会・記念講演会 日時：6/11(日)午後2時から 場所：埼玉教育会館 14：00 開場 14：30～14：50 第10回通常総会 15：00～16：30 記念講演会 16：45～18：30 懇親会 ○6/25(日)常務理事会		■宝登山下草刈り作業 日時：6/25(日) 集合：9：00/宝登山 ロープウェイ駅前広場		
7月					◎福島県田村市植林状況調査 日時：7/2(日) 行程：未定
8月	○8/20(日)常務理事会		■宝登山下草刈り作業 日時：8/20(日) 集合：9：00/宝登山 ロープウェイ駅前広場		
9月					
10月	■会報34号発行 ○10/16(月)常務理事会	◆第41回和名倉山ワーク 日時：10/21(土)～22(日) 集合：8：30/西武秩父駅			
11月	●11/20(月)理事会				◆第22回公開講座 日時：11/12(日) 会場：未定
12月	○12/18(月)常務理事会				

和名倉百年の森 第33号 2017年4月1日発行

発行者：NPO法人百年の森づくりの会 小林公彦

NPO法人百年の森づくりの会 事務局

〒330-0055 さいたま市浦和区東高砂町11-1 コムナーレ9階

さいたま市市民活動サポートセンター内 メールボックスA-71

TEL/FAX：0480-22-3131

http://www.100nen-forest.org e-mail: info@100nen-forest.org